

[論文]

保育士像と保育士としての職業選択の関係
—保育実習 I を通して形成される学生の保育士像に着目して—

浅井 拓久也

A Study on the Relationship between the Image and Career Choice
of Nursery School Teachers:
Focusing on the Image made through Practical Training 1 in Nursery School

Takuya Asai

キーワード：保育実習、保育士像、保育士としての職業選択、対応分析、多項ロジスティック回帰分析

Key Words : practical training in nursery school, image of nursery school teacher, career choice of nursery school teacher, correspondence analysis, multinomial logistic regression analysis

要約：本研究の目的は、保育実習 I（保育所）を通して形成される学生の保育士像と保育士としての職業選択の関係について明らかにすることであった。分析結果として、「子ども一人ひとりに応じた援助ができる」、「安全で安心な環境を作ることができる」、「子どもの成長や発達を支え促すことができる」という保育士像は保育士という職業選択につながり、「責任の重い仕事ができる」という保育士像はつながらないことが明らかとなった。

Abstract : The purpose of this research was to clarify the relationship between the image of and career choice of nursery school teachers after practical training 1 in nursery school. As the result of correspondence analysis and multinomial logistic regression analysis, it was shown that three images of teachers who can (1) make some supports according to each one of children, (2) make secure and safe surroundings, and (3) support children's growth and development were positively relevant to career choice of teachers. However, the image of teachers who can execute their great responsibilities affected the choice negatively.

1 研究背景と課題設定

本研究の目的は、保育実習 I（保育所）（以下、保育実習）を通して学生が形成する保育士のあるべき姿（以下、保育士像）と保育士としての職業選択との関係について明らかにすることである。

昨今、保育所の役割はこれまで以上に重要になっている。保育所の利用率という観点では、平成 23 年では 33.1% だったが、平成 30 年では 44.1% となっている。特に、保育所を利用する 1・2 歳児は平成 23 年では 31.0% だったが、平成 30 年では 47.0% となっており、毎年増加している（厚生労働省 2018）。核家族世帯の増加や女性の就業率の上昇を踏まえれば、保育所を利用する 1・2 歳児は今後も増加することが予想される。

また、保育所保育の質という観点からは、保育所は子どもが 1 日の大半を過ごす空間であることはもちろんのこと、乳幼児期は子どもの認知的能力や非認知的能力が大きく伸びる時期であることから、保育所保育の質の向上がいつそう求められている（経済協力開発機構 2018）。特に、国内外の研究から乳幼児期に質の高い幼児教育を受けることで非認知的能力を育むことが、その後の人生にも大きな影響を及ぼすことが指摘されている（Sophie Naudeau et al 2001, Heckman 2015）。こうした研究成果を踏まえて、2017 年に改定された『保育所保育指針』においても、保育所における乳児保育や幼児教育を充実することが示されている。

保育所の役割の重要性が高まっていく一方で、保育の担い手である保育士の確保はいつそう難しくなっている。特に、保育所を利用する 1・2 歳児が増加しているということは、1・2 歳児に対する保育士の配置基準からしても、保育士の確保が難しくなることを意味する。そのため、保育士資格を有するが就労していない、いわゆる潜在保育士の復職を支援する事業が全国各地で行われている。たとえば、待機児童が多く、保育士の確保に課題を抱える東京都では、保育士資格を有するが就労経験がない（少ない）潜在保育士を対象に保育士としての復職を支援する研修会や相談会を毎年実施している⁽¹⁾。

こうした取り組みは保育士の確保に欠かせないが、着目すべきは保育士を養成する指定保育士養成施設の現況である。なぜならば、指定保育士養成施設は保育士の最大の供給源の 1 つであり、四年制大学や短期大学等を合わせた入学定員も増えつつあるにもかかわらず、実際に保育士として就職する学生は多くないからである。卒業時に保育士資格を得て保育所へ就職した学生は 46.0% という調査結果もある（厚生労働省 2009）。保育士を確保するためには、保育士資格を得た学生が保育士として就職する割合を増やすことが不可欠である。

以上の背景を踏まえて、本研究では保育実習を通して学生が形成する保育士像と保育士としての職業選択の関係性を明らかにする。学生が就職先を検討する際は、職場の人間関係や労働環境、給与や社会的な評判等、様々な要因を考慮するだろう。しかし、保育士という職業を選択するか否かに関しては保育実習の経験が及ぼす影響は大きいであろう。保育実習を通して保育士の役割や業務内容を理解し、保育士像を形成していく過程で、保育士として

の自らの適性や将来性を考えるようになるからである。先行研究から保育実習前後で学生の保育士像が変化することが明らかとなっているが⁽²⁾、保育実習後にどのような保育士像を形成するかが保育士という職業選択をするか否かの分岐点の1つと考えられる。

2 研究方法

(1) 調査概要

調査対象者は、3つの指定保育士養成施設（短期大学 X、短期大学 Y、四年制大学 Z）において、保育実習を修了した直後の学生とした。保育実習後の保育士像を取り上げるのは、最初の保育実習が保育士としての就職の選択に与える影響が大きいからである（田瓜・小泉 2009、大野 2018）。短期大学 X では、保育実習の受講者 150 名のうち 137 名から回答を得た（回収率 91%）。また、翌年にも同様の調査を行い、保育実習の受講者 118 名のうち 114 名から回答を得た（回収率 97%）⁽³⁾。短期大学 Y では、保育実習の受講者 77 名のうち 59 名から回答を得た（回収率 77%）。四年制大学 Z では、保育実習の受講者 142 名（3 年生）のうち 141 名から回答を得た（回収率 99%）。

調査方法は、質問紙調査とした。授業内にて質問紙を配布し、回収した。質問紙は選択式と記述式の混合とし、本研究に直接関係する項目のみならず、保育実習全般に関する質問を行った。なぜなら、調査対象者には、保育実習での学びの振り返りとして各質問への回答を求めたからである。

調査期間は 2018 年 3 月から 4 月としたが、短期大学 X のみ 2019 年 4 月にも調査を行った。保育実習を終えてから時間が経過しすぎると、保育実習の経験の記憶が曖昧になったり変更されたりする可能性があることから、上期間内で行った。

(2) 分析に使用する項目

分析には、次の 2 つの質問項目を用いた。まず、保育実習後に希望する就職先がわかる「実習を終えて、今の時点で希望する就職先を選んでください」である。「保育士」、「幼稚園教諭」、「保育士か幼稚園教諭」、「一般企業など」の 4 件法とした。

次に、保育実習を通してどのような保育士像を形成したのかがわかる「実習を終えて、保育士とはどのようなものだと思いますか」である。本質問は自由記述であることから、誤字脱字のような明らかな間違いに関しては修正した。また、自由記述を文単位で分析するため、句点がついていない記述には句点をつけた。さらに、分析の都合上、「子供」や「こども」を「子ども」、「声がけ」や「声掛け」を「声かけ」、「お母さん」や「おかあさん」を「母親」のように同じ意味の言葉を統一した。以上の 2 つの質問項目の両方に回答されているもののみ分析に使用した（394 件、87%）。

本研究では保育士像の抽出において自由記述式の質問を使用した。先行研究では、保育実習の経験と保育士としての職業選択の関係について選択式の質問によって明らかにするこ

とが多かった(田瓜・小泉 2009、胡・古谷 2014、坪井 2017、大野 2018)。しかし、選択式の質問にはあらかじめ複数の選択肢が用意されていることで、回答者が意識や自覚していなかったことまで選択されるという限界がある。それゆえに、選択式の質問から得た結果と実態が乖離する可能性がある⁽⁴⁾。

一方で、自由記述では、回答者がそもそも意識や自覚していないことは記述されにくい。また、回答する際に、保育士とはどのような職業か、保育実習を通して理解した保育士とはどのような姿だったかを振り返る必要があるが、記述することは選択肢を選ぶよりも回答者の負担が大きいことから、回答者が必要性や重要性を感じていることが優先して記述されやすい。以上を踏まえると、保育実習を通して形成された保育士像を抽出するためには、選択式ではなく自由記述式の方がより正確に抽出しやすいと考えられることから、自由記述の分析を行った。

(3) 分析方法

分析は以下の手順で行った。まず、「実習を終えて、今の時点で希望する就職先を選んでください」の回答を、保育士という職業選択の可能性(以下、選択可能性)の観点から3つに分類した。「保育士」は「選択する」、「保育士か幼稚園教諭」は「選択するかもしれない」、「幼稚園教諭」と「一般企業など」は「選択しない」とした。

次に、実際に回答に出現した言葉に焦点を当てるため、選択可能性別の特徴語の抽出と対応分析を行った。分析には、KH Coder 3 を使用した。特徴語は、Jaccard の類似性測度に基づいて選択可能性別に特徴的な上位 10 語を抽出したものである。特徴語を抽出する際は、分析の精度を上げるために茶筌によって複合語を検出し、検出結果を KWIC コンコーダンスで確認した。この結果、「一人ひとり」等のような複合語を強制抽出する対象とした。また、対応分析では、最小出現数は 15、分析に使用する差異が顕著な語は上位 50 語とした。対応分析の結果を表す図では、原点 (0, 0) 付近を係数 3 として拡大した。

最後に、自由記述の回答をカテゴリ化し、保育士像と選択可能性の関係を分析した。具体的には、「実習を終えて、保育士とはどのようなものだと思いますか」の回答に対して階層的クラスタ分析を行い、カテゴリ(保育士像)を抽出した。分析には KH Coder 3 を使用し、集計単位は文、最小出現数は 15、クラスター数は Auto とした。SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いて、抽出したカテゴリに即して回答を自動的に 2 値データ化した。以上を踏まえて、保育士像を独立変数、選択可能性を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った。分析には、Stata 15 を使用した。

(4) 倫理的配慮

調査対象者が回答する前に、調査目的と内容、回答は学術研究の目的でのみ使用されること、回答と保育実習の評価は無関係であること、自由意志であること、回答は無記名式で行

うこと、回答は途中で放棄することや提出を拒むことができること、質問紙は一定期間経過後に適切な方法で破棄すること等が口頭で説明された。回答の提出をもって調査対象者の同意を得たとした。

なお、2019年に短期大学Xで行った追加調査を除いて、本研究で使用する回答は全国保育士養成協議会平成29年度ブロック研究助成金研究（代表者：浅井拓久也）による調査から得たものである。同調査については、本研究の倫理的配慮の概要を要約した「平成29年度ブロック研究助成金研究における倫理的配慮について」を全国保育士養成協議会事業調査課宛に送付し承認を得た。

3 結果と考察

(1) 特徴語と対応分析の結果

保育士という職業の選択可能性別に、保育士像を表す特徴語を整理したのが表1、対応分析の結果を示したのが図1である。

表1と図1の「選択する」と「選択しない」を比べると、「選択する」では「安全」や「安心」、「成長」や「発達」、「援助」や「見守る」というように、保育士の専門性を象徴するような言葉が多く見られた。実際の回答（一部、以下同）を確認すると、「安全」や「安心」については、「子どもへの保育だけでなく、おもちゃ等の清潔保持・安全への配慮、常に危険予測をされていてすごいと思いました。」「子どもたちに社会で生きていく為に必要な事を伝える。のびのびと過ごせる環境づくりをする。子どもにとって安心できる人。」とあった。「成長」や「発達」については、「1日子どもたちと過ごし、子どもたちの安全に気を付け、子どもたちがしっかりと成長していけるように手助けをするもの。」「子どものことを第一に考え、発達段階に合わせた保育を行うこと。」とあった。「援助」や「見守る」については、「子どもの成長を援助したり、見守ったりし、子どもとたくさん遊び子どもの成長を支える。」「子どもの成長を一番近くで見守り、遊びや発達活動を通し、子どもと関わり生活を共にしていく職業。」とあった。

また、「選択する」の特徴語として「考える」が出現していた（表1）。図1から、「選択する」と「考える」が近くに布置されおり、「選択する」という回答を選んだ回答者の自由記述には「考える」という言葉が多く出現していたことがわかる。実際の回答では、「子どもと関わることだけが大切ではなく、その周りのことを全て考えるもの（家族や、環境等）。」「子どもが主体となり保育を広げていくということであり、それまでには環境構成や活動内容など子どもの発達に必要なもの、成長する上で大切なことは？を常に考え楽しく過ごせる様な設定を考えることだと思いました。」とあった。このように、「考える」という言葉も、保育士の専門性を象徴するような言葉として使用されていた。

一方、「選択しない」では、「大変」、「責任」、「職業」、「仕事」のように、保育士という職業の大変さや負担を表すような言葉が多く見られた。実際の回答では、「とても大変で、子

表 1 選択可能性別の特徴語

選択する	選択するかもしれない	選択しない
子ども .401	子ども .215	保育 .133
思う .168	保育 .118	大変 .117
考える .151	人 .108	仕事 .093
成長 .138	生活 .068	大切 .051
仕事 .087	援助 .063	見る .051
援助 .067	感じる .058	責任 .049
見守る .061	必要 .055	職業 .049
見る .061	信頼 .054	信頼 .043
安全 .059	自分 .044	母親 .035
存在 .057	一緒 .043	たくさん .035

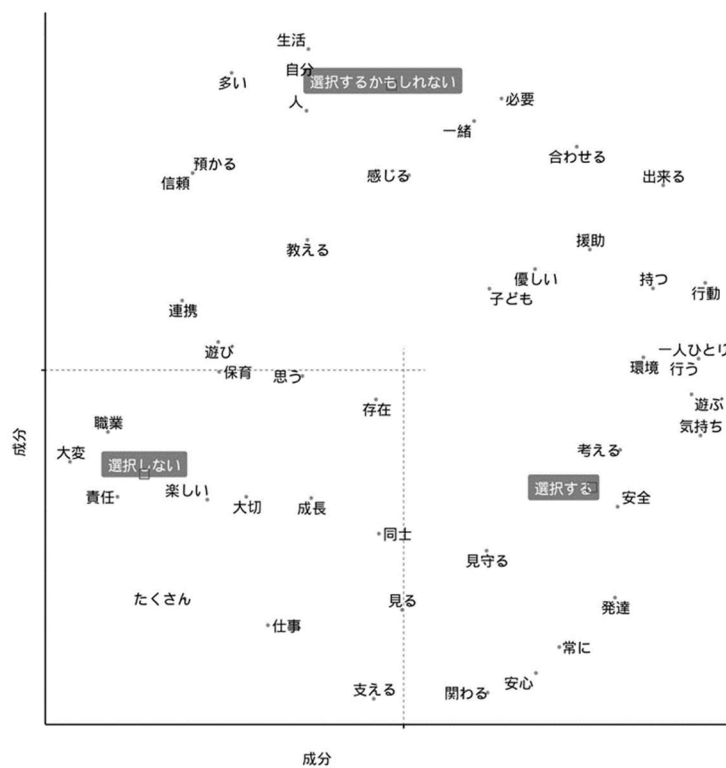


図 1 選択可能性別の対応分析 (布置図)

どもたちをまとめる時や次の活動に移る時の声かけを考えたり、忙しい職業だと思いました。」、「忙しくて大変だけど、やりがいがある職業。命を預かる責任の大きい職業。」、「きつい仕事。楽しいだけではやっていけない。」、「優しくときに厳しく。子どもの見本となる人。子どもを一番に考えられる人。責任が重い仕事だと思った。」とあった。

また、図1では、「選択しない」の近距離に「楽しい」という言葉が布置されている。一見すると、「大変」という言葉とは逆向きの言葉のように見える。しかし、実際の回答を確認すると、「責任ある、その中でも保育士同士の協力だったり保護者や子どもたちとの信頼だったりただ楽しいだけではない大変な部分もかなりある。」、「きつい仕事。楽しいだけで

はやっていけない。」「子どもの命を預かる仕事。毎日、同じ生活の中で、どのようなことをすれば楽しいのか、成長できるのかなど、常に子どものことを考えている。」とあった。このように、「楽しい」という言葉は保育士の大変さや保育の難しさを表す言葉と共に使用されていた。

「選択するかもしれない」では、「子ども」と「援助」は「選択する」、「保育」と「信頼」は「選択しない」の特徴語としても出現していたが、「選択しない」に出現していた「大変」、「責任」、「職業」、「仕事」という言葉は見られなかった。

(2) 多項ロジスティック回帰分析の結果

まず、「実習を終えて、保育士とはどのようなものだと思いますか」の回答に対して階層的クラスタ分析を行った。分析結果として得られたデンドログラムを踏まえて、5つのカテゴリを抽出した(表2)。デンドログラムからは6つのクラスターを得ることができたが、意味内容を考慮して5つのカテゴリとした。

表2 階層的クラスタ分析の結果を踏まえたカテゴリ

カテゴリ(保育士像)	含まれる語の例
子ども一人ひとりに応じた援助ができる	子ども、気持ち、援助、保育
安全で安心な環境を作ることができる	安全、安心、環境、関わる
子どもや保護者から信頼を得ることができる	信頼、必要、存在、感じる
子どもの成長や発達を支え促すことができる	成長、発達、支える、見守る
責任の重い仕事ができる	責任、職業、大変、仕事

次に、SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を用いて、表2で示した5つのカテゴリに即して自由記述を自動的に2値データ化した。そのうえで、選択可能性別に各カテゴリに該当するものを集計し(表3)、カテゴリを独立変数、選択可能性を従属変数とする多項ロジスティック回帰分析を行った(表4)。なお、表3と表4では、表2のカテゴリの表記を「子ども一人ひとりに応じた援助ができる」は「援助」、「安全で安心な環境を作ることができる」は「環境」、「子どもや保護者から信頼を得ることができる」は「信頼」、「子どもの成長や発達を支え促すことができる」は「成長」、「責任の重い仕事ができる」は「責任」と簡略化して示した。

表4から、「選択しない」から「選択する」を比較すると、「子ども一人ひとりに応じた援助ができる」(オッズ比は1.653倍)、「安全で安心な環境を作ることができる」(オッズ比は2.304倍)、「子どもの成長や発達を支え促すことができる」(オッズ比は2.275倍)という保育士像は保育士という職業選択につながる可能性を高めることがわかる。一方、「責任の重い仕事ができる」(オッズ比は.657倍)という保育士像は保育士という職業選択を回避させるものであることがわかる。「子どもや保護者から信頼を得ることができる」という保育士像は影響を及ぼしていなかった。

表 3 選択可能性とカテゴリーの関係

	選択するか		
	選択する	もしれない	選択しない
援助	81	73	49
環境	159	72	69
信頼	35	65	48
成長	157	69	69
責任	69	57	105

表 4 選択可能性の多項ロジスティック回帰分析

選択可能性		B	標準誤差	Wald	p 値	オッズ比	95% 信頼区間	
							下限	上限
選択する	援助	0.503	0.181	7.713	0.005 **	1.653	1.159	2.357
	環境	0.835	0.144	33.533	0.000 ***	2.304	1.737	3.057
	信頼	-0.316	0.222	2.019	0.155	0.729	0.472	1.127
	成長	0.822	0.144	32.399	0.000 ***	2.275	1.714	3.020
	責任	-0.420	0.155	7.340	0.007 **	0.657	0.485	0.890
選択するかも しれない	援助	0.399	0.185	4.659	0.031 *	1.490	1.037	2.140
	環境	0.043	0.168	0.064	0.801	1.043	0.750	1.452
	信頼	0.303	0.190	2.538	0.111	1.354	0.933	1.966
	成長	0.000	0.170	0.000	1.000	1.000	0.718	1.396
	責任	-0.811	0.185	13.788	0.000 ***	0.543	0.393	0.749

参照カテゴリ：選択しない

注：*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

また、「選択しない」から「選択するかもしれない」を比較すると、「子ども一人ひとりに応じた援助ができる」（オッズ比は 1.490 倍）という保育士像は保育士という職業選択につながる可能性があるが、「責任の重い仕事ができる」（オッズ比は 1.543 倍）という保育士像は職業選択を回避させるものであることがわかる。「安全で安心な環境を作ることができる」、「子どもや保護者から信頼を得ることができる」、「子どもの成長や発達を支援促すことができる」という保育士像は有意な影響を及ぼしていなかった。

(3) 考察

本研究によって明らかとなったことを 2 つに整理し、それらを踏まえた考察を行う。まず、保育実習を通して、保育士とは「子ども一人ひとりに応じた援助ができる」、「安全で安心な環境を作ることができる」、「子どもの成長や発達を支援促すことができる」職業であるという保育士像を形成することが、保育士という職業選択につながる可能性を高めることが明らかとなった。特に、「安全で安心な環境を作ることができる」と「子どもの成長や発達を支援促すことができる」という保育士像が保育士という職業選択につながることは注目に値する。

一般的に、ある職業を選択するか否かを定める際には、当該職業の報酬や社会的な評価を考慮するだけでなく、そもそもどのような仕事なのか、自分はその仕事を遂行できるかを

理解する必要がある。職業に対する具体的なイメージをもつことができるかどうかとも言える。この意味では、保育士という職業やその専門性は学生にとってイメージしにくい（したことになりやすい）ものであろう。手遊びやリトミックのような実技的なものと比べると、子どもの発達段階や子どもと遊ぶという営為の背後にある保育士の発達支援は教科書や講義から具体的にイメージすることは容易ではない。保育実習を経験することによって、発達とは何か、発達支援のあり方についてイメージを鮮明にし、理解を深めていくのである（松永他 2002）⁽⁵⁾。これは、子どもの安全や安心を考慮した環境構成についても当てはまるであろう。

また、小島（2012）は「保育者をめざした理由を聞くと、『子どもはかわいい』、『子どもが好き』という答えが多く、中学校などにおける職業体験や授業の中の「保育」体験で、少し乳幼児とふれ合ったことが思いの土台となっていたり、『とりあえず資格がとれるから』という安易な考えで入学してくる学生も少なくない」と、保育士という職業や専門性について学生が十分に考えていないことを指摘している。

しかし、保育実習は保育士という職業やその専門性とはどのようなものかが可視化される機会の1つである。実際の保育の様子や子どもたちの言動に対する保育士の対応から、子どもの発達支援や環境構成のイメージを構築していくのである。保育士がすべき業務内容は多岐に渡るが、子どもの発達支援や安全で安心できる環境構成は保育士の専門性の中心的なものである。保育実習を通してこれらに着目し具体的なイメージをもつことは、保育士という職業や専門性のイメージを明確にすることになっているのであろう。それゆえに、保育士という職業選択ができるようになるのではないだろうか。

次に、「責任の重い仕事ができる」という保育士像は保育士という職業選択に消極的な影響を与えていることがわかった。先行研究では、保育実習前には保育士の責任に関する記述は見られず実習後に見られるようになることが指摘されているが（浅井 2018）、本研究からこうした責任の重さに焦点を当てた保育士像は保育士という職業選択につながりにくいことがわかった。

保育士に限らずどのような職業でも責任は伴うが、保育士は子どもの健康や生命を確実に守ったり、多様な背景をもつ保護者の子育て支援をしたりするという重責を担う。また、昨今は、保育所での死亡事故だけではなく、日々の保育や保育所の運営のあり方にも社会的に厳しい眼差しが向けられている。こうした責任の重さは負担になることから、職業選択を回避したのではないかと思われる。実際の自由記述でも、「子どもの安全や健康を第一に考えて行動しなければならない責任の重い仕事。」「大切な子どもを預かるのでとても大変なことがある。それとともに責任が伴うものである。」「命を預かる仕事であり、責任感を持つことが必要。」「命を預かる責任の大きい職業。」とあった。

4 総合的な考察と今後の課題

本研究の課題は、保育実習を通してどのような保育士像が形成されると保育士という職業選択につながるかを明らかにすることであった。これまでの分析結果や考察を踏まえると、保育実習を通して専門家としての保育士像を形成することが、保育士という職業選択につながりやすいことがわかった。指定保育士養成施設に入学する前は保育士の専門性について十分に考えていなくても、保育実習を経験することで保育士の専門性や責任を学ぶ。加えて、職業選択という観点から見れば、保育士が果たすべき責任よりも、保育士の専門性に焦点が当たるようにすることが必要であると言えよう。

本研究では保育実習を通して学生が形成した保育士像を抽出するために、自由記述を分析した。自由記述に回答する際には、保育実習を振り返り、思い起こすというプロセスが必要になる。記述という行為に伴う手間や負担を鑑みると、回答には学生が最も意識したことや最も印象的なことが記述されると考えられる。その回答において、保育士の責任の重さや大変さが記述されているということは、保育士の専門性だけではなく、保育士が果たすべき責任、保育の大変さが強く意識されていたということである。もちろん、保育士の責任の重さを理解することは重要なことである。しかし、保育士の責任の重さが保育実習からの学びの中心になってしまうと保育士という職業選択につながりにくいことからすれば、保育士の責任以上に、保育士の専門性に焦点を当てるようにしていくことが必要であろう。

これは、保育実習時のリアリティ・ショックをどのように乗り越えるかが重要になるということでもある (Ball, S. J. & Goodson, I. F. 1985)。リアリティ・ショックは、誰にでも起こり得るものであり、どのように乗り越えたかによって専門家として成長できるか否かが左右されると言われている。すなわち、リアリティ・ショックを乗り越える際、保育士という職業の責任の重さや難しさばかりを感じるのか、保育士の専門的な知識や技術が発揮されている様子を学び取るのかによって、保育士という専門家としての成長は難しいと考えるか、期待するかが決まるのである。リアリティ・ショックの経験は、保育士という職業選択をするか否かだけでなく、保育士か幼稚園教諭かの職業選択の分岐点でもあり、その乗り越え方が職業選択と関係しているのである⁽⁶⁾。

このように、保育実習時のリアリティ・ショックの乗り越え方が重要であるとすれば、実習施設も養成施設も保育士としての成長につながる乗り越え方になるように様々な工夫をしていく必要があるだろう。もちろん、実習施設や養成施設が置かれている状況や資源によって具体的な方法は異なるため、その方法は多様である。しかし、本研究の結果を踏まえれば、保育士の専門性を学ぶことができているかどうかを1つの視点とすることができるであろう。

実習施設の中には、学生に保育実習は楽しかったという印象をもってほしい、あるいは保育士の責任や負担を実際以上に少なく見せることで当該の実習施設への就職を期待するという意図から、実習日誌や指導計画の添削では誤字脱字の点検に留まったり、学生のやり方を尊重するため、学生の主体性を伸ばすためという言説を前景化したりすることで、専門的

な指導を控える施設もあると言われている。しかし、専門職としての保育士像は保育士としての業務内容や役割を理解し、保育士としての職業選択につながる可能性が高いということからすれば、実習施設のこうした姿勢は好ましいことではないであろう。保育士は楽しいことばかりではないことや、母親の代理をすればよいのではないことは学生自身も気がついている。だからこそ、保育実習を通して保育士の専門性が理解されるようにする必要があるのである。

養成施設にとっては、保育実習前後の指導や訪問指導が重要になるであろう。特に、訪問指導を通して学生が保育士をどのように捉えているかを把握し、保育士の重責という保育士の1つの側面ばかりに捉われている場合は、保育士の専門性と重責の関係に目が向くようにする等、適切な指導をしていくことが必要である⁽⁷⁾。職業における専門性の高さや責任の重さは比例関係にあることが多く、保育士の専門性と責任は表裏一体とも言えるからである。実際、現代社会では保育士に求められる役割や責任は多様化、複雑化しつつあり、こうした状況に対応するために子どもの保育や家庭での子育て支援に関して幅広く、高度な専門性が求められるようになってきている。保育実習を通して保育士はやりがいのある専門職であるが責任が重い、ではなく、責任は重いやりがいのある専門職であるという視点で保育士を捉えることができるような指導をすることが重要になると思われる。

もちろん、保育実習は保育士としての職業選択につなげるためだけに行うものではない。保育実習以外の要因が保育士という職業選択に影響を及ぼしていることも言うまでもない。しかし、現代社会の要請として保育士の確保が必要であり、保育実習を通して形成される保育士像と保育士という職業選択が関係していることからすれば、保育実習での経験(保育士像の形成)と保育士としての職業選択という観点から、実習施設と養成施設それぞれが保育実習のあり方や相互の連携に関する議論をし、より効果的な保育実習を模索していく必要があると思われる。

本研究では、保育実習前に希望していた就職先を分析に含めていなかった。そのため、保育実習前に希望していた就職先と専門職としての保育士像の形成の相互関係や、これらと保育実習後に希望する就職先の総合的な関係については明確にできなかった。また、保育実習Ⅱ前後の保育士像や希望就職先を含めた保育実習Ⅰからの時系列的な分析も必要になる。多くの学生は保育実習Ⅰだけではなく、保育実習Ⅱの経験も踏まえて保育士としての職業選択をするか否かを決めるからである。実際、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの目的と内容はそれぞれ異なるため、保育実習Ⅱでは保育実習Ⅰが学生の保育士像に与えた影響とは異なる影響が予想される。今後、これらを踏まえた研究が求められる。

注

- (1) 潜在保育士の復職支援に関しては、東京都保育人材・保育所支援センターのホームページに詳しく紹介されている。

- (2) 保育実習前後における学生の保育士像の変化に関する先行研究の整理は、浅井(2019)にて行った。
- (3) 2018年度と2019年度の入学生の属性に著しい変化を与えるような入学試験方式や学費等の変更はなかった。
- (4) 保育者の資質について選択式の質問を行った高桑他(2010)は、「保育者の資質として挙げられた、礼儀、社会人としてのコミュニケーション能力、意欲、研究心、責任感、計画立案、子ども理解、環境設定、基礎技能、文章能力、創造性、といった内容何れの重要性においても、短大生、幼稚園教諭双方から高い評定値が示された。しかし、回答動向の検討の結果、1年生は挙げられたすべての資質に一律に高評価をする傾向が見られ、保育者の資質をそれぞれ具体化して思考することが難しいということが示唆された」と指摘している。
- (5) 松永他(2002)によると、保育や子どもに関する学生の理解について保育実習前後で様々な項目を比較したところ、子どもの発達に関する理解が最も向上していた。
- (6) 大野(2018)は、リアリティ・ショックの観点から、保育(教育)実習時に対してどのようなイメージをもつかがその後の進路選択(保育士か幼稚園教諭かの選択)に重要な影響を与えると指摘している。
- (7) リアリティ・ショックが大きいほど、保育士や保育の全体像を正確に捉えるのではなく、1つの見方や考えに拘泥しやすい。胡・古谷(2014)は「保育の現場で起っている出来事が目新しく刺激的であるほど、それにとらわれてしまい、正確に状況を把握して行動をすることは困難になる。また、そういった状況であるほど、一つの考えに固執し、他の意見を聞き入れることが困難になるであろう」と指摘している。

引用文献

- 浅井拓久也(2019) 専門職としての保育士像の形成に関する研究－保育所実習前後における保育士像の変化に着目して. 秋草学園短期大学紀要, 35, 14-28
- Ball, S. J. & Goodson, I. F., eds. (1985) *Teachers' Lives and Careers*. Falmer Press
- 胡泰志・古谷嘉一郎(2014) 保育観察実習が保育専攻新生に及ぼす影響－保育者効力感、社会人基礎力、進路選択動機及び一次救命処置に関する認識に着目して. 比治山大学紀要, 21, 93-102
- James J. Heckman (2015) 幼児教育の経済学. (古草秀子訳). 東洋経済新報社. (James J. Heckman. (2013) *Giving Kids a Fair Chance*. MIT Press)
- 経済協力開発機構(OECD) 編著(2018) 社会情動的スキル－学びに向かう力. 明石書店
- 小島千恵子(2012). 保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究－実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に. 名古屋柳城短期大学, 34, 157-167
- 厚生労働省(2009) 第1回保育士養成課程等検討会参考資料1(保育士養成関係資料)

- 厚生労働省 (2018) 保育所等関連状況取りまとめ (平成 30 年 4 月 1 日)
- 松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子 (2002) 保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響. 鎌倉女子大学紀要, 9. 23-33
- 大野和男 (2018) 進路決定における保育実習・教育実習の重要性と実習時のリアリティ・ショック. 鎌倉女子大学紀要, 25. 35-48
- Sophie Naudeau et al. (2001) *Investing in Young Children: An Early Childhood Development Guide for Policy Dialogue and Project Preparation*. THE WORLD BANK, Washington, D.C.
- 高桑秀郎・濱田尚吾・太田裕子・花田嘉雄 (2010) 短大生が考える「保育者に求められる資質」に関する意識についての検討—現職幼稚園教諭の意識との比較から. 羽陽学園短期大学紀要, 8 (4). 61-68
- 田瓜宏二・小泉裕子 (2009) 実習担当保育者の持つ実習生のイメージと実習生に期待する資質に関する検討. 鎌倉女子大学紀要, 16. 13-23
- 坪井敏純 (2017) キャリア形成に及ぼす保育実習体験と就職支援の課題. 鹿児島女子短期大学紀要, 52. 97-102